

# 1876年フィラデルフィア万国博覧会における 日本と中国の展示

Exhibition of Japan and China in 1876 year Philadelphia world fair

楠元町子

KUSUMOTO Machiko

キーワード：1876年フィラデルフィア万国博覧会、日本の展示品、中国の展示品

## 1. はじめに

フィラデルフィア万国博覧会は、1876（明治9）年5月10日から11月10日まで独立百周年を記念して開かれ、米国で初めての大規模な万国博覧会であった。会期中の入場者は約1,000万人、会場ではタイプライター、ミシン、大型蒸気機械が展示され、米国の工業技術の発展を世界に誇示した<sup>1</sup>。

博覧会開場は、中央に本館展示場が建てられ、アメリカ合衆国との地理的な位置関係、人種に応じて各国の地区が割り当てられた。日本は中国とともに本館の西部分に展示地区が割り当てられた<sup>2</sup>。

1851（嘉永4）年イギリスの首都ロンドンで「全人類が現在までに到達した技術、産業、文化を示す」<sup>3</sup>という主旨の下に、万国博覧会が世界で初めて開催された。鎖国体制を取っていた日本に、ペリー（*Matthew Calbraith Perry*, 1794-1858年）が来航し、開国を迫ったのは万博が初めて開かれた2年後、1853（嘉永6）年であった。翌年日本は日米和親条約を結び、世界に向けて交流を開始したのである。

明治政府が公式に万国博覧会に参加したのは、1873（明治6）年のウィーン万国博覧会であった。近世より評価が高かった陶磁器、銅器等の金属工芸品が高い評価を受け、漆器・竹細工等の工芸品や生糸・絹織物等が賞を多く獲得した<sup>4</sup>。明治政府はペリー来航以来の日米関係を重視したとともに、輸出増進のために日本の製品の紹介と他国の産業を調査することを目的として、フィラデルフィア万国博覧会への参加を決断した。

フィラデルフィア万国博覧会は、第1回内国博覧会の前年に開催され、その模範となった重要な万国博覧会であり<sup>5</sup>、建築も含めて日本の文物が実質的に米国人の目に触れた最初の機会でもある<sup>6</sup>。

フィラデルフィア万国博覧会に関する主な研究としては、明治政府の参加経緯や参加目的を詳細に述べた関根仁の論文<sup>7</sup>や、フィラデルフィア万国博覧会の日本の建築物を明らかにした畑智子の論文<sup>8</sup>、米国の新聞に掲載された記事や挿絵から日本の展示物の内容と評価を考察し

た坂本久子の研究<sup>9</sup>がある。これらの論文では陶磁器や磁器など日本の伝統工芸品の展示や建築物については詳細に明らかになっているが、実用的な日本の製品を紹介し、輸出増進や日本のイメージ向上に貢献した女性館や農業館の展示についてはあまり触れられていない。

本稿は米国の博覧会事務局による公式記録やガイドブックから、米国の展示物、日本の最大のライバルである中国の展示物、日本の展示物と米国での評価を考察することにより、欧米の近代化を唯一の進歩と考える万国博覧会で、日本のイメージ向上と輸出増進に果たした役割を明らかにしたい。

## 2. フィラデルフィア万国博覧会の概要と米国の展示

### 1) フィラデルフィア万国博覧会の概要

フィラデルフィア万国博覧会 (International Exhibition of Arts, Manufactures and Products of the Soil and Mine) は、1776年に米国が英国から独立してから100年を経過したことを記念として、初代大統領ワシントンが創設した地であるペンシルヴァニア州フィラデルフィアにおいて開かれた。フィラデルフィアは、1776 (安永5) 年7月4日にアメリカ独立宣言が採択され土地であり、米国で最初の大規模な本格的万国博覧会となった。会期は1876 (明治9) 年5月10日から11月10日、会場はフェアマート公園、会場総面積115万平方メートル、建物面積28万9千平方メートル、入場者1,016万人であった<sup>10</sup>。

開催目的は、國務長官Hamilton Fishが次のように述べている<sup>11</sup>。「この博覧会の目的は、アメリカ独立宣言という歴史的な興味深い国家的行事の100周年を記念すること、また同時に、間もなく終わる今世紀のうちの発展と文明化のために成し遂げられた多大な進歩と成功の例証として役立つよう、あらゆる国の芸術と産業の成果を展示する適切な機会を提供することである。」

参加国は、欧州からフランス、ドイツ、イタリア、ロシアなど13カ国、南北アメリカとカリブ海からアルゼンチン、ブラジル、ホンジュラス、カナダなど15カ国、アジアから中国、タイ、日本の3カ国、アフリカからオレンジ自由国、エジプト、リベリア、チェニスの4カ国とニュージーランド、トルコの37カ国に及び、19世紀後半の世界において主な国はほとんど参加していた。

主要パビリオンとして本館 (Main Exhibition)、美術館 (Art Gallery)、機械館 (Machinery)、農業館 (Agricultural hall)、園芸館 (Horticultural Hall) が建てられ、その他に小パビリオンとして米国各州の展示館、女性館、日本やスウェーデン、英国など外国の展示館などが数多く建てられた。

南北戦争後のアメリカ社会の発展はめざましかった。1860 (万延1) 年から1914 (大正3) 年にかけて、合衆国の人口は3倍に、工業労働者の数は5.5倍に、工業生産額はほぼ12倍に、産業投資の額は22倍に、それぞれ増加し、1890 (明治23) 年には工業生産額が農業生産額を追い越すにいった<sup>12</sup>。急激に米国が経済成長した時に、その国力を世界に誇示しようとしたの

がフィラデルフィア万国博覧会であった。

## 2) 米国の展示—インディアンの野営地 (Indian Encampment)

本館はアメリカと諸外国の工業品の展示に割り当てられていたが、アメリカだけで3分の1が占められ、機械館はアメリカを含め14カ国が出展したが、展示物の8割はアメリカからの出展であった<sup>13</sup>。機械館では巨大な高性能の「コーリス・エンジ」が唸りをあげ観客を驚かせた。そのほかタイプライター、ミシンなどの「発明」や「アイデア」を提示する新しい製品が展示された<sup>14</sup>。

米国は、合衆国軍によるインディアン討伐が大詰めを迎え、1876（明治9）年から77（明治10）年にかけては大平原各地で凄惨なグレート・スー・ウォーが戦われ、リトルビッグホーンの戦いでは、スー族の指導者、シッティング・ブルがジョージ・A・カスターの第七騎兵隊を撃破するという一時的勝利をおさめたものの、インディアンたちは辺境のリザーベーション（居留地）へと囲い込まれつつあったのである<sup>15</sup>。

フィラデルフィア万国博覧会の米国の展示は、そのような状況を如述に表すものであった。フィラデルフィア万国博覧会に関する情報を詳細に記述し、会場で販売されたガイドブック“*Magee's Illustrated Guide of Philadelphia and the Centennial Exhibition*”は、万国博覧会の最も興味深いものとして「インディアンの野営地」を挙げ、以下のように述べている。

ジョージ・ヒルのふもと、日本館の近くにある保留地（reservation：政府指定保留地）には、この博覧会で最も興味深い見ものの一つ、「インディアンの野営地」が見られることになる。ここでは、テキサスの有名なガイド兼スカウトであるジョージ・アンダーソン（George Anderson）の直接監督下のもと、53の部族を代表する先住民300人以上が見られる予定である。どの部族からも、様々な年齢の男女4～8人が代表として来訪し、アメリカの先住民をベストな状態で見るができるよう、最もふさわしい家族のみがこの博覧会のために選ばれている。フロンティアから来るこの来訪者の多くは、各部族の酋長とその家族であり、その他はほとんど全員、勇敢な行為や、完全な姿と容貌、または他の希少な天賦の才能や功績があることで名高い人々である。こうした赤い肌のゲストは、インディアン界の「超一流の人々」である。数々のテント小屋、調理器具、闘争用の武器、農具、製造器具、そして多数のポニーと犬も、このインディアンたちによって持ち込まれた。彼らは、毛布や帯を織機で織る仕事、バッファローなどの皮を取る仕事、陶器を作る仕事、石器を作る仕事、モカシンやバスケット、装飾品等を作る仕事など、多岐にわたる各自の仕事を行うことになる<sup>16</sup>。

「インディアンの野営地」に来た部族は、ウォーム・スプリング族の酋長、カイオワ族の酋長、コマンチ族の酋長や戦士、アラパホ族、パイユート族、アパッチ族の代表者などであり、米国がインディアン先住民を彼らの先祖代々の土地から保留地に移住させることに成功したことを示していた。「眼前に広がるフィラデルフィア万博の風景は新しいアメリカ文明の勝利、必然的な進歩の産物以外の何物でもないというメッセージを読者＝入場者にひそかに伝えるこ

と」<sup>17</sup>が、ガイドブック作成者の目的の一つであったと思われる。

欧米の近代化を象徴する万国博覧会で、欧米と異なる文化を持つアジアの国である中国と日本は、万国博覧会でどのように位置づけられ、また如何なる戦略をもって参加したのか、次に述べたい。



(図1 THE MAIN EXHIBITION BUILDING)

### 3. 万国博覧会における日本と中国の展示の変遷

1851（嘉永4）年第1回ロンドン万国博覧会では、「中国から大きな花瓶・清朝官僚の肖像画・青銅器・陶磁器・屏風・牙彫・七宝焼などが展示された。その中の中国からの陶磁器とベッドのフレームが展覧会から賞を授与された。」<sup>18</sup>中国の展示品は、中国の福州駐在総領事を務めたオールコック（Sir Rutherford Alcock, 1809-1897年）が送ったものであった。

1862（文久2）年第2回ロンドン万国博覧会では、日本の展示品が初めて万国博覧会の会場に展示された。江戸幕府が正式に展示物を送ったのではなく、駐日英国公使に赴任していたオールコックが収集した品物を主にロンドンに送った。オールコックの尽力により、公式に参加する前から万国博覧会に中国と日本の産物は展示され、欧州の人々に紹介されていた。

1867（慶応3）年パリ万国博覧会では、日本の徳川幕府はナポレオン3世から正式に招請を受け、水戸藩主徳川斉昭の第十八子昭武以下二十六人を派遣した<sup>19</sup>。日本の出品地区は中国、タイと共有であり、全会場の128分の1を展示場に割り当てられていたが、中国の出品物が少なかったため日本が展示場の半分以上を使用した<sup>20</sup>。中国からは正式には誰も派遣されず、旗幟の新鮮さと冠や服の華麗さで人目を引いていた広東の劇団の一行や、中国パビリオンで中国の伝統的な衣装を身にまとい、客に中国特産の茶を供していた数名の女性のみが見られた<sup>21</sup>。

1873（明治6）年ウィーン万国博覧会は、明治政府が初めて公式参加し、パビリオンの敷地を提供され日本庭園をつくった。本館建物は櫛型あるいは魚の骨格のような形をし、球形の地球を紡錘形のつながりに切り分け、平面に展開した形をしていた。日本と中国は東の端に出品区が与えられ、西の端にはアメリカ合衆国が位置し、ウィーン万国博覧会の会場はまさに世界地図を表現していた<sup>22</sup>。

日本は、参議大隈重信を臨時博覧会事務局総裁とし、巨額の国費を費やして参加し、神社、神楽堂、鳥居などを模した日本館を造営した。中国はオーストリア政府からの外交的圧力もあり、万国博覧会への出品業務を通関と関税徴収の業務を果たしていた中国海関の統括者たる総税務司ハート（Hart, Sir Robert）に委任した。これまでの万国博への中国の出品と比べて、

その数量・種類とも何倍にもなり、評価も高かったので、1905（明治38）年のリエージュ万国博覧会まで中国海関が万国博覧会への出品業務を行うようになった<sup>23</sup>。

上記に見られるように、1870年代の万国博覧会では、日本と中国は東洋という一つの区分で展示場を与えられていた。中国は万国博覧会に無関心であったが、日本は欧米諸国と同等な位置を得るために積極的に関与して行った。

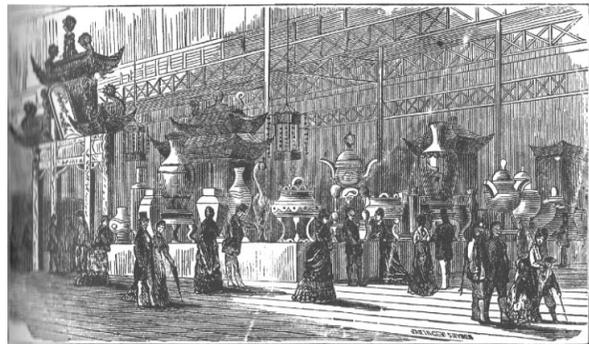
1876（明治9）年フィラデルフィア万国博覧会では、中国は公式に人を派遣した。博覧会副総裁西郷従道は1876（明治9）年2月28日に米国へ向かう太平洋郵船北京号で、清国のフィラデルフィア万国博覧会事務官米国人ハモンド氏（J.L.HAMMOND）に会い、清国の万博への参加状況を次のように聞いた<sup>24</sup>。「清国政府は税関にいる洋人3人（英人1人、沸人1人、米人ハモンド氏）を事務官としてフィラデルフィアに派遣し、上海の商社からも米人を雇うつもりだが、物品がまだ全く整頓されていないので入品の期限を延ばしてもらうつもりだ。」中国の万博準備は外国人が主体であり、順調に進んでいなかったようである。

#### 4. フィラデルフィア万国博覧会における中国の展示と評価

##### 1) 中国の展示

フィラデルフィア万国博覧会における中国の展示内容と、米国が中国の展示品をいかに評価したのか。James D. McCabe. が1877年に出版した「図説フィラデルフィア万博史」“*The Illustrated History of the Centennial Exhibition*” は中国の展示品について次のように記している<sup>25</sup>。

「中国の展示区画は、日本の区画の半分に満たず、日本の区画のすぐ西側にあり、この区画は囲いによって区切られていた。その入口は、中国のパゴダの入口を模したもので、派手な彩色と、体をくねらせた恐ろしい竜の飾りが施されていた。」中国の展示区域の入り口は派手な色彩と竜の飾りで人目を引き、展示品は豪華で巨大なものが多かった。「正面の入口には、精妙な陶磁器である見事な花瓶が集めら（図2 THE CHINESE COURT, IN THE MAIN BUILDING）れ、その反対側には、最高級の絹のパネルを並べたついたてがあり、これには一面に刺繍の模様があり、豪華な彫刻を施した木枠が付いていた。そのすぐ先からは、象嵌細工を施したテーブルやスタンドなどの家庭用品が展示されており、これが全展示を貫いていたその展示品は、日本の展示区画にあった類の物と同じくらい立派で 良くできており、このことは予想外であった。」



米国人が中国の技術の素晴らしさに驚いたのは、パゴダをかたどった背の高い陳列棚の中に

展示されていた絹織物、金襴ならびに刺繍品と家具であった。「絹織物は最も繊細な色合いで最高品質のものであった。彫刻を施した家具の大規模な展示もあり、すべて中国式の家具であった。彫刻部分は芸術的なデザインで、出来ばえも優れていた。凝った造りの寝台架（ベッドの枠組み）が2台展示されており、これはとても素晴らしく、ジョン・チャイナマン（中国人）が、派手な色彩や、けばけばしい装飾を好む中で、堅実な快適さを見抜く目もあることを示していた。」展示品は、中国人が派手でけばけばしいものを製造するだけでなく、芸術的で快適な製品も創作する力があることを表していた。



(図3 CHINISE PAGODA, IN THE MAIN BUILDING)

さらに中国が古い歴史と世界に多くの影響を与えたことを誇る磁器と陶器の展示は、「大規模かつ立派なものであり、中国人の技能の評判を十分に裏付けるものであった。漆器の展示品も非常に素晴らしかったが、日本のコレクションにあった漆器にはかなわなかった。青銅製品は、その多くが古くて好奇心をそそるもので、大規模な興味深いコレクションを成していた。」展示場には、人目を引いた背の高いパゴダの「神像の家」があり、その近くには中国の風変りな人物が描かれている立派な磁器タイルがあった。

展示場内には、「アーモンド型の目をしたお下げ髪の中国人が多数、自国の衣装を身に纏って、至る所に散らばっていたので、来場者は、まるで自分と博覧会との間に海を挟み、中国の大きなバザールにでも突然上陸したような想像に一瞬かられたかもしれない。」中国の展示場は、エキゾチックな雰囲気 に溢れていたのである。

中国の展示品は、外国人によって企画され並べられたため、欧米人が抱いている中国イメージを前面に出した展示となり、米国の観客の好奇心を満足させるものであった。

(図4 PAGODA AND GROUP OF VASE, IN THE CHINISE SECTION)



## 2) 中国の展示品の評価

フィラデルフィア万国博覧会公式カタログ<sup>26</sup>では、製造国として中国は極めて際立っており、「磁器はすべて中国に端を発しており、また、絹糸の紡績術も、中国から西洋に渡ったものである。中国で作られた漆器は、非常に見事ではあるが、日本の漆器よりは劣ると見なされるに違いない。しかし、もっと細かい彫刻作品や象嵌作品に関しては、中国人に勝るものはない。」世界の国々は磁器、絹糸の紡績術、漆器、象牙、真珠、火薬、紙等、数多くのものが中国発祥の技術の恩恵を受けていると指摘し、漆器は日本に劣っていると、日本の技術力を評価している。

米国の新聞紙は、「支那ノ場内奇巧ノ物少シト雖もモ外装ノ義衆目ヲ奪フ」<sup>27</sup>と、中国の出品物よりも、展示区間に建てられた派手なパコダや入口の建造物が人目を惹き多くの客を集めていたと指摘している。中国代表の李圭は中国の出品物について、次のように自負していた<sup>28</sup>。「中国の出品物は、中国海関により代行するものと、広東商人の出品物を合わせると、その額は20万海関両にのぼった。中国の糸、茶、陶磁器は大人気であった。とりわけ陶磁器が展示されると売り切れた。」

日本の報告書は、中国の展示品について次のように記している<sup>29</sup>。本館の展示品は「陶銅器七寶及ヒ雕牙工木具等ナリ銅器ハ極メテ古色ヲ帯フ」、試しに聞くと漢朝の遺物で1800年を経過していると答えるが、ほとんどは古い物に偽装している。洋客もこれを疑って、日本の商人に聞いてくるので、各器を配列し、凡そ200年前、50年前と説明したが、清国の商人はそれについて何も言わなかった。しかし「七寶ハ其箱紋繁縟ナラスシテ」大変素晴らしく、日本が所製したものより優れていた。日本は、中国の展示品には製作年代を大幅にごまかしていたものもあったが、細かい技術を要する象嵌作品については、米国同様に高く評価していた。

万国博覧会において、中国と日本の展示は常に比較されて評価されていた。日本と中国の輸出品は同じものが多く、同じアジアというイメージで欧米に働きかける強烈なライバルであった。万国博覧会は、日本の独自性と技術力を世界に直接アピールし、輸出増進出来る貴重な機会であったが、全体的に中国の展示は中国政府の積極的な関与が感じられなかった。

## 5. フィラデルフィア万国博覧会における日本の展示

### 1) 日本の参加経緯

1873（明治6）年7月5日米国国務省ハミルトン・フィッシュより在米日本公使高木三郎に「ヘンシルバニヤ府ニ於テ術百工土地及ヒ鑛山ノ産物ノ萬国博覧会ヲ紀元一千八百七十六年四月十九日ニ開業シ同年十月十九日閉業ノ議ヲ布告ス」という亜米利加合衆国大統領の布告文と博覧会規則とともに、万国博覧会へ参同出品の依頼があった<sup>30</sup>。

1874（明治7）年4月20日には、外務卿寺島宗則に在日アメリカ公使ビンハムから「工芸館技術館並びに遊園に於いて日本出品の為に區形何程有用ノ概算」を至急知らせてほしいという通知が来た<sup>31</sup>。明治政府は米国にフィラデルフィア万国博覧会に参同する意を伝え、同年6月には日本国内に万国博覧会への出品布告をした。

事務局は、博覧会総裁に内務卿大久保利通、副総裁に陸軍中将西郷従道が任じられ、町田久成事務官長、事務官田中芳男以下36名、御用掛特命全権公使吉田清成以下8名、審査官佐藤元狩以下3名で組織された<sup>32</sup>。

政府はフィラデルフィア万国博覧会の参同目的について、「學術工芸の進歩を著し交易資益の通義を拡る為にて天然人造の諸品を産出し世界各国の高評を受べし殊に工は工芸の精妙を盡し名譽を發すべし就中去年奥国博覧会に出品せし職工は多くは夫々賞譽を受けたるにより此度

は猶一層の進歩榮譽を著すべし商いは交易利便用の道を開き以て専ら繁栄を計るに注意すべし」<sup>33</sup>と述べている。

さらにフィラデルフィア万国博覧会の参同商品は、澳國博覧会に比し著しく實際的傾向を加へ、「本邦商品の紹介たると同時に又主催国及至参同國の出品物に対し周到なる調査研究を遂げ以て我國殖産興業の直接の利益足らしめんとせり<sup>34</sup>」そのために、明治政府は『費府博覧会日本品目録』“*International Exhibition, 1876, Official Catalogue of the Japanese Section and Descriptive Notes on the Industry and Agriculture of Japan*”を英語で印刷し、日本の農業と工業について生産地や製作方法を詳しく解説し、日本人が古来から丁寧なものづくりに努めてきたこと、日本には優れた技術と製品、豊かな自然と産物があることを広めようとした。

ペリー以来の米国との関係を重視した参加であったが、米国での日本人のイメージ向上や日本商品の輸出増加を目論み、本館、農業館、園芸館、女性館に展示し、2棟の建物を建築し、米国に日本の高度な伝統技術、優雅な日常生活、滋味豊かな農水産物の紹介に努めた。

## 2) 日本の建築物

フィラデルフィア万国博覧会まで、展示は共用の大会場で、売店は各国それぞれのお国ぶりで建てるといふ二本だてであり、国別展示館としてパビリオンが建つようになったのは、1878(明治11)年のパリ万博以後であった<sup>35</sup>。日本を世界に具体的に知らせる貴重な機会として、売店の建設には注力したのである。

フィラデルフィア万国博覧会で日本が建てた建築物は、日本政府による Japanese Bazaar(売店)と金沢の河村幸の出資による Japanese Dwelling(住宅家屋)の2棟である<sup>36</sup>。日本の建築物は、建設中から欧米と異なる建築方法や職人たちの服装、行動が関心を呼び、連日見物客を引き寄せた<sup>37</sup>。

日本の売店はパブリック・コンフォート局の建物のすぐ北側に位置していた。その周囲の庭には囲いがあり、日本式庭園として区分けされていた。売店の建物は、低くてむやみに広い構造となっていて、区画の3辺を取り巻いて建てられており、構成材はすべて、彫刻を施した木材となっていて、波状の重い陶製タイルの屋根(瓦)で覆われていた。北側は、ほぼ完全に開け放たれ、張り出したひさしと、紙製のカーテンのみで風雨を防ぐ形となっていた。天井と壁と床には、タイル貼りを模した塗装が施され、品物が展示されカウンターも多くには、豪華な装飾と奇怪な彫刻が施されていた。売店の案内係の大半は、着物を着ていた<sup>38</sup>。



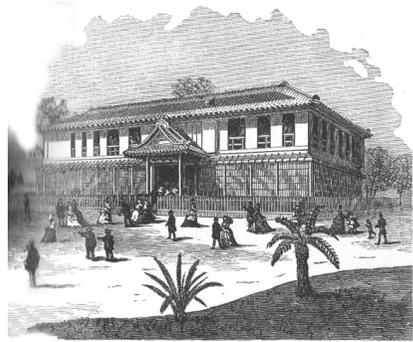
(図5 THE JAPANESE BAZAAR-CENTENNIAL EXHIBITION)

売店に並べられた商品は、七宝会社陶銅器、東京新井半兵衛の漆器、太田萬吉の木具、工商

会社の茶、長岡善八の醤油味醂、肥前の香蘭社の陶磁器、薩摩西京及び横浜の真葛、加賀の九谷、東京の瓢池園、高岡及び東西京の銅器、玩具雑品団扇扇子、静岡の竹器寄木器等であった<sup>39</sup>。

明治政府は、日本中から主要な特産品を集め、それらを販売することで、米国の市場調査をし、今後の輸出に生かそうとしていた。万国博覧会は、日本独自の調味料である醤油や酒などを欧米に紹介する重要な機会であった。

日本の住居を再現したのがJapanese Dwelling(住宅家屋)である。日本の住宅家屋はジョージ・ヒルの東側斜面にあり、スペインの建物の北側に位置していた。これは木造2階建ての低い建物で、それを覆う屋根は装飾的な形の重量タイルで出来ていた。建物の各面は移動可能な羽目板で出来ていて、入口部分の上には好奇心をそそる彫刻が施された木材が複数あり、その木目と仕上がりは非常に見事であった。屋内には家具が豪華に備えられていた。上品なデザインの絨毯が床を覆い、部屋のしつらえは日本式で、上品さを備えたシンプルなスタイルであった。壁には、植物の繊維を精巧に織ったカーテン(簾)がかけられ、これは室内への人目ならびに太陽の光は



(図6 JAPANESE DWELLING)

遮ることができる一方、空気は通すものであった。この建物は日本人コミッションナーの私邸で、来場者は立入り禁止であった<sup>40</sup>。

屋根には瓦が置かれ、部屋は襖で区切られ、欄干や畳を用いたシンプルでかつ実用的な美に溢れた日本の住居が、再現されていた。欧米諸国から見れば日本は遅れたアジアの国というイメージがあるが、そのイメージを翻し、日本女性の美しい日常生活を米国人に示す役割を果たしたのが、女性館の展示であった。

### 3) 女性館 (WOMEN'S PAVILION) における日本の展示

女性館は女性による展示物を収容した建物で、米国女性の寄付による30,000ドルを費やして建てられた。女性部 (Women's Department) の目的は、最高レベルの女性作品を展示すること、一般には知られていない実用性と利益の手段を示すことである<sup>41</sup>。展示品は限定され、代表的な彫刻作品、絵画、文学作品、版画、電信術、リトグラフ、教育、およびあらゆる種類の発明品限られ、実用工芸品が多く展示された<sup>42</sup>。

日本は、米国から女性館(女工館)への出展を求められ、「我衆婦ニ命シテ製造出品セシムル問合モ無之ニ付本館へ陳列可致物品ノ内ニテ全ク女工製品ノ分ノミ取分ケ<sup>43</sup>」て、



(図7 WOMEN'S PAVILION)

女性館に展示した。女性館の展示は、以下のようであった<sup>44</sup>。

「ここには、日本の女性が身に付けた素晴らしい製造技術による品々が展示され、それは日本の評判を十分に裏付けるものであった。美しいだけでなく実用的でもあるこうした展示品の中には、葉巻入れ、飾り棚、裁縫箱、文机および手提げ箱などがあり、すべて木製で、漆と象嵌による最も繊細な装飾が施され、その多くには、飾りとして、グロテスクではあるが全く非芸術的というわけではない人物が象牙と黒檀で描かれていた。」女性館の展示品は、日本人が実際の日常生活で使用している製品がいかにも芸術的であり、日本の女性の技術が優れているか示していた。

さらに日本人の器用さと芸術性を著していたのが、形も色も本物そっくりの造花や数えきれないほどの扇図が施されていた大きな屏風であった。屏風は多数出展されていたが、最も人目を引いていたのは6枚板の大きな屏風で、「金めっきと銀めっきを施した黒檀の枠組が付いて、屏風の裏面には粋なデザインの金の文様が一面に施され、正面は、黄色の絹地に様々な女性用扇が刺繍されていた。それに描かれていたのは、日本の高級官僚、職人、商人、職工、農民、曲芸師で、こうした職業はすべて世襲となっている。絵姿そのものは紙に描かれていたが、衣服の部分は、その様々な飾りや微小な細部をすべて含め、絹でできていて、他に展示されている日本の多くの絵と同じく、表面から浮き出ている。」扇面という変則的な画面に様々な絵を描き、それらを一つの屏風に組み込むという構図の見事さ、刺繍によって表面から高く浮き上がらせることによる遠近法の効果も狙うなど高度な芸術性が米国人を驚かせた。

「複数の仕切りと背なしの腰掛が付いた飾り棚はきわめて見事な作品で、万人の称賛を受けていた。また、平絹および刺繍入りの絹のサンプル展示についても、その素材の上等さだけでなく、風変わりでありながら実に美しいデザインという点からも、特に興味深いものであった。」日本の女性が制作した作品は、実用的であり、細部まで芸術的に作られていたが、デザインの面ではグロテスク、風変わりであるが美しいという評価であった。女性館の展示品は、日本女性の技術力とともに扇図に日本人の職業を描くなど日本人への理解を深める役割も果たしていた。

明治政府は、主力輸出品である生糸の展示には大変注力していた。そのため、生糸の製造過程を詳細に説明した“*Silkworm Breeding NO YOSANKAKARI*”を配布し、日本の生糸の品質の優秀さをアピールするとともに、万国博覧会の会場で絹織物の製造品を直接見せることにより、輸出増進に繋げようとしたのである。

#### 4) 本館の展示

本館では礦業品、製造品、教育品が展示された。本館の展示品としては日本の古美術品、漆器の金色と色彩、色彩豊かな陶磁器だけでなく、白と青のモノトーンの磁器にも目が向けられ、配合や対比に芸術性が見いだされているものがあつた<sup>45</sup>。

教育品は、文部省が「教育史文藝誌ヲ始メ学校設置ノ順序学事ノ景況等総テ教育関涉ノ件々

其他書籍器械雛形ニ至ル迄<sup>46</sup>」出展し、使用している机と学校装置のモデル、生徒の作品、教科書、主要な学校の写真があった<sup>47</sup>。

“*The Illustrated History of the Centennial Exhibition*”は、「本館では、この展示について、我々はほんの概略を示したに過ぎないが、来場者は、この展示をざっと見ただけでも、日本に対する考えを改めるしかなかった。我々はこれまで当然のように、日本を未開国か、せいぜい半文明国と見なしていたが、一般教育(art)では、欧州の最も洗練された国々より優れていることの十分な証拠がここで見られた。一般教育(art)は、そうした国々の誇りと栄光であり、その高度な文明の最も輝かしい象徴の一つとみなされている。」<sup>48</sup>と、日本の教育が決して欧米に劣っていないことを称賛している。

米国の公式カタログは、教育について以下のように高い評価をしている<sup>49</sup>。「日本では、教育はきわめて一般的である。1871(明治4)年に文部省が創設され、その努力の結果、公立の小学校が、とくに町で急速に増えている。ただ、その動きは、奥地よりも、西のほうの県や、沿岸部のほうが、はるかに顕著である。外国語の習得を促すため、政府は欧州人教師を雇っており、また、公費で多数の生徒を欧州と米国に送っている。」さらに1875(明治8)年には鉄道が開通したことに触れ、日本の教育が広く普及し、欧米への留学を進めるなど外国語の習得に力を入れていることを述べ、日本が決して遅れた国でなく、欧米と同様な近代化を推進していることを指摘している。

### 5) 農業館の展示

農業館に展示された日本の農水産物は、滋味豊かであり、日本人の食生活の豊かさを示していた。農業館における日本の展示については、“*The Illustrated History of the Centennial Exhibition*”が以下のように詳細に紹介している<sup>50</sup>。

「日本の展示区画は、ホールの南東角、オーストリアの区画のすぐ西側にあり、キャンパス地のついたてで、複数の狭い通路に分割されていた。各通路にて、棚が複数の長い列を成し、そこに展示品が並べられていた。南側の壁に沿って日本産タバコのサンプルが展示されていたが、この区画でそれよりもっと広い部分を占めていたのは、日本の茶の展示であった。茶のサンプルが展示され、また、茶の木の各成長段階を示した何枚もの絵を用いて、茶の栽培過程が説明されていた。」

日本が開国した頃、輸出されたものは第一に生糸、ついで茶(緑茶)、蚕卵子であった。しかし世界商品として流通していたのは緑茶ではなく紅茶であった<sup>51</sup>。茶(緑茶)の輸出拡大の



(図8 BRONZE VASE, EXHIBITED IN THE JAPANESE SECTION, MAIN BUILDING)



(図9 JAPANESE BRONZE VASE, IN THE MAIN BUILDING)

ためには、栽培過程を説明することで、日本の茶が中国や他の国と違い、風味や味にこだわって、丁寧に生産していること良品であることを示した。

さらに水産物は重要な輸出品であったため、米国人の興味を引くように展示方法を次のように工夫していたのである。「西側の壁沿いに日本で使用されている釣り道具や漁網や燻製魚のサンプルも展示していた。サンプルの一部はベーコンのようにキャンバスに包装されていた。頭上には魚網が吊るされていた。」

この区画の南通路の北側には、日本が誇る生糸を展示していた。「日本で営まれている養蚕の様子を示した素晴らしい展示があった。それを示す手段として、蚕と繭の標本、繭綿のサンプル、および模型と絵が用いられ、それには英語の説明が付いていた。」

魚や動物の皮ならびに貝殻の大規模なコレクションや、官営工場で作られた木綿のサンプルが展示されていた。手釣り用漁具について、「私たち米国人が使っているものと非常によく似ていたが、そのきちんとした作りは、あらゆる日本の細工品の特徴である。」日本人の器用さや真面目に取り組む姿勢が認められていた。

「穀物をはじめとする日本の農作物を系統的な分類に従って展示し、日本に自生する木の展示には、それぞれの角材に、もとの木の葉と小枝の標本が付けたり、植物性物質で作られた醤油を石の瓶に詰めたものを多数おく」など、農業館の展示には米国人が日本への関心と理解を深めるような工夫がされていた。

農業館の展示品には、たばこ、茶、水産物、養蚕、木材、穀物などが展示され、特に茶と生糸の展示には力を入れていたことが伺われる。明治期、お茶の輸出の8割は米国とカナダで占められていた。北海道開拓使が販売の目的で農業館に出品する予定である松魚薫肉と鹿腿薫肉には、「米人ノ好尚適否モ辯シ難ク又館中ニ於テ衆人ニ與ヘ試食サスル義ニモ相成兼因テ各国事務官と会場中各国割烹店へ<sup>52</sup>」、説明文とともに贈ることにするなど、世界に日本の味を広める工夫をした。

日本は、フィラデルフィア万国博覧会の機械館には展示していなかった。欧米と比べて圧倒的に工業技術が劣っていた日本は、生糸やお茶などを輸出して外貨を稼ぎ、富国強兵と、新たな産業を興すための資金にあてる必要があったため、一次産品的な輸出商品のPRを熱心に行っていた。万国博覧会では、日本各地の特産品を並べ、当時の世界で売れる商品の開発に取り組んだ。

## 6) 日本の展示の評価と役割

開港後輸出品として、最も注目されたのは生糸と茶であった。これらの商品は、日本に先立って開港した中国の諸港において重要輸出品であったが、日本産のものが比較的良質・低廉であることを知った外国商人は、積極的にそれらを買付けて欧米市場に送った。とくに生糸の輸出は活発で、輸出総額の5割ないし8割に達する有様であった。両品以外の輸出品としては、水油・銅・木蠟・海産物（昆布・すめ・乾鮑）などがあった<sup>53</sup>。欧米から高く評価された陶

磁器が、輸出品の中で重要な地位を占めるようになるのは明治後半からであり、1900(明治33)年ごろまでは生糸、茶、水産物、石炭が外貨獲得に大きな役割を果たしていた。

表1 日本の主な輸出品と金額（単位千円）

	明治9年 (1876年)	明治19年 (1886年)	明治29年 (1896年)	明治39年 (1906年)	大正5年 (1916年)	大正15年 (1926年)
生糸	13,200	17,414	28,831	110,499	267,037	734,052
製茶	5,454	7,723	6,372	10,767	16,082	12,112
水産物	1,314	2,826	3,249	8,295	12,487	22,669
石炭	776	2,209	8,879	16,280	20,406	31,032
木材及板	95	141	814	9,329	12,318	17,980
陶磁器	74	1,002	1,975	7,943	12,104	33,182
綿織物	11	231	2,224	15,619	60,051	416,255
絹織物	3	75	7,439	35,679	50,632	133,070
輸出品総額	27,711	48,876	117,843	423,755	1,127,468	2,044,728

（『明治大正国勢総覧』東洋経済新聞社1988年、466-486頁より作成）

フィラデルフィア万国博覧会が開催された1876（明治9）年以降の輸出品を10年ごとに金額ベースで見ると、生糸、絹織物や綿織物が大幅に増加したことが分かる。日本と米国の貿易についてもフィラデルフィア万国博覧会后、輸出が順調に増大しており、大正に入って輸入も急拡大していった。「貿易金額は最初、英国、中国、仏蘭西の下位にあったが、明治12年に俄かに一千万円台に躍進し、爾来我国輸出第一の得意先となった。」<sup>54</sup>

表2 日本と米国の貿易量（単位千円）

	明治9年 (1876年)	明治12年 (1879年)	明治19年 (1886年)	明治29年 (1896年)	明治39年 (1906年)	大正5年 (1916年)	大正15年 (1926年)
輸出	5,798	10,879	19,992	31,532	125,964	340,245	860,880
輸入	1,125	3,212	3,359	16,373	69,949	204,079	680,185

（『明治大正国勢総覧』460頁より作成）

表3 日本の米国に対する輸出品目と金額（単位千円）

貿易品	明治29年 (1896年)	明治39年 (1906年)	大正5年 (1916年)	大正15年 (1926年)
生糸	14,081	78,392	224,093	709,379
製茶	5,218	9,142	13,309	10,088
絹織物	2,378	10,183	14,196	26,263
陶磁器	803	4,333	4,167	13,948

（『外国貿易概覧』明治29年、明治39年、大正5年、大正15年より作成）

万国博覧会への参加に際して政府は、海外で注目を浴びる美術工芸品や、日本庭園を備えたパビリオンで伝統的な「日本」イメージを演出し、一方で主要輸出品である生糸や、その他醤油、酒、素麺、菓子などを出品して、今後の輸出振興を図ることを目的とした<sup>55</sup>。

米国の公式カタログの付録の統計（Statistical Appendix）では、日本の産業について次のよう高く評価している<sup>56</sup>。主要な製造物は、絹製品と綿製品である。国内交易はきわめて広く行われており、家内産業を保護・促進するため、厳格な規則が施行されている。日本人は、職人技とくに、冶金や、磁器・漆器・絹織物の製造では大いに卓越している。こうした分野の中には、生産された作品のデザインも出来ばえもあまりにも素晴らしく、欧州の最高の製品に匹敵するどころか、それを上回っている分野もある。

フィラデルフィア万国博覧会の日本の展示を見ると、欧州の万博でも好評を得た陶磁器や絹織物だけでなく、江戸時代に培われた技術が欧米に受け入れられ、明治初期の輸出を支え、外貨獲得の原動力となったことが分かる。

米国の新聞紙は、本館の展示の中で進歩が著大で卓越しているのは日本が最とし「其青銅器ノ如キハ實ニ精巧絶妙ニシテ他ノ金属工物ノ能ク之ニ敵スル者ナキヲ知ル東洋陶器漆器ノ工亦此國ニ在テ前未タ曾テ此ノ如キ精品ヲ」見たことはない。そしてその原因は「国民工業ニ勉勵スルノ力ニ由ル」のであり、「帝国自然ノ美産アル亦以テ徴スヘキ耳ト又鑛物学ノ出品ト各種教育ノ諸式ノ整列シタル且ツ展品ノ撰擇最モ各国ニ超越シタルヲ讚セリ」<sup>57</sup>と述べている。

日本の展示品は、現地の報道でも極めて高い評価を受けていた。鉱物学や教育の整列された展示を見れば、国民の勉学に励む力が高い技術力を支えており、天然資源に恵まれた豊かな国土があることが分かったと、日本の力を称賛していた。

## 6. おわりに

フィラデルフィア万国博覧会の中国の展示の内容を見てみると中国発祥の技術に高い評価を受けた一方、アジアの大国としての出展が非常に大きく望まれたにもかかわらず、清朝政府があまり熱心でないこともあり、万国博覧会に対する意気込み、自らの関与が薄い印象が持た

れた。

中国の物品は、1851（嘉永4）年のロンドン万博以来、常に出品・展示されてきたが、当時の清朝政府は万国博覧会に関心をもたず、万国博覧会を「費珍耀奇」で無益の行いと見なし、万国博覧会そのものを白眼視し続け、参加することに何の意義も必要性も感じていなかった<sup>58</sup>。

一方明治政府は、万国博覧会での「列品は展覧のためであり、見本品として国産の各種を出しているの、米国の好尚に不適品もあり、売れ残り品もあっても、今後の輸出品を考える上での参考となる。」<sup>59</sup>と考えていた。概ね日本の展示品は高い評価を受けることが出来、明治後半から大正にかけての生糸・絹織物・綿織物の輸出増大に貢献したと見られる。特に開催国である米国との貿易強化につながり、日本の産業振興に大いに貢献したと考える。

欧米と異なる文化を持つ日本は、輸出を拡大するためには、日本製品を紹介するだけでなく、製品の使用方法を日本の文化と共に説明する必要があった。それには、万国博覧会はまたとない機会であった。鎖国をやめ、世界との交流を積極的に推進していた明治政府は、万国博覧会に出展する製品を国が選別し、出展に際しては補助金を出すなど極めて高い関与をした。

日本は「近代世界システム」の中で押し付けられた役割を変えるために、いち早く西欧諸国と同様な近代化を旨とし、技術習得と近代国家日本のイメージ獲得を目的とし万国博覧会に積極的参加していった。一方万博に無関心であった中国は、万博初期から外国人に出品物の収集を委託していたため、西欧人が抱くエキゾチックなイメージを凝縮した展示を行っていた<sup>60</sup>。

日本と中国というアジアにおける最大のライバル国のフィラデルフィア万国博覧会における展示の内容を評価すると、両国政府の関与に大きな差があり、欧米への対応と近代化への取り組みの姿勢が表れていたのである。

<sup>1</sup> 吉田光邦『万国博覧会』NHKブックス、1985年、78-81頁参照。

<sup>2</sup> 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年、23頁。

<sup>3</sup> 松村昌家『ロンドン万国博覧会と水晶宮—ロンドン万国博覧会（1851年）新聞・雑誌記事集成 別冊解説』本の友社、1996年25頁。

<sup>4</sup> 國雄行『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策—』岩田書院、2005年、37頁。

<sup>5</sup> 同上41頁。

<sup>6</sup> 畑智子「1876年フィラデルフィア万国博覧会の建築にみる「日本」」『日本建築学会計画系論文集』第503号、1998年、195頁。

<sup>7</sup> 関根仁「一八七六年フィラデルフィア万国博覧会と日本—参加過程・状況を中心に—」『中央史学』二四、中央史学会、2001年。

<sup>8</sup> 前掲「1876年フィラデルフィア万国博覧会の建築にみる「日本」」。

<sup>9</sup> 坂本久子「フィラデルフィア万国博覧会本館における日本の出品物と会場構成」『デザイン学研究』特集号13、2005年。

- <sup>10</sup> 『海外博覧会本邦参同史料（第1輯）』フジミ書房、1997年、103-104頁。
- <sup>11</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia: A Collection of Official Records and Miscellaneous Publications*, James D. McCabe, *The Illustrated History of the Centennial Exhibition Held in Commemoration of the One Hundredth Anniversary of American Independence*, Eureka Press, Volume4,2014,p211.
- <sup>12</sup> 亀井俊介・鈴木健次監修『史料で読むアメリカ文化史3』東京大学出版会、2006年、1頁
- <sup>13</sup> 「1876年フィラデルフィア万博」<http://www.ndl.go.jp/exposition/s1/1876.html>  
2015年10月31日参照。
- <sup>14</sup> 吉田光邦『万国博の日本館』株式会社INXS、1990年、14頁。
- <sup>15</sup> 亀井俊介・鈴木健次監修『史料で読むアメリカ文化史3』東京大学出版会、2006年、3頁。
- <sup>16</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia, op.cit., Magee's Illustrated Guide of Philadelphia and the Centennial Exhibition: A Guide and Description to All Places of Interest in or about Philadelphia, to the Centennial Grounds and Buildings, and Fairmount Park*, Eureka Press, Volume 1, pp173-174.
- <sup>17</sup> 大井浩二『フィラデルフィア万国博覧会（1876年）—公式資料と日本関連文献集成—』別冊日本語解説、7頁。
- <sup>18</sup> 馮赫陽「初期万国博覧会に見られる『中国趣味』から『日本趣味』への趨勢について」『東アジア文化交渉研究』第3号、2010年、513頁。
- <sup>19</sup> 山本光雄『日本博覧会史』理想社、1965年、233頁。
- <sup>20</sup> 渋沢栄一『航西日記』『渋沢栄一伝記資料』第一巻、508頁。
- <sup>21</sup> 鈴木智夫「万国博覧会と中国—1851～1876—」『愛知学院大学人間文化研究所紀要』第11号、1996年、69頁。『図説万国博覧会』149頁。
- <sup>22</sup> 吉田光邦編『万国博の日本館』株式会社INAX、1990年、54頁。吉田光邦『図説万国博覧会史1851-1942』思文閣出版、1985年、38-39頁。
- <sup>23</sup> 前掲「万国博覧会と中国—1851～1876—」70-74頁参照。
- <sup>24</sup> 国立公文書館蔵、記録材料『米国博覧会事務誌略付録完』アジア歴史センター、Ref. A 07062485000.
- <sup>25</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia*, op.cit., Volume 4, *The Illustrated History of the Centennial Exhibition Held in Commemoration of the One Hundredth Anniversary of American Independence*, pp446-449.
- <sup>26</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia*, op.cit., Volume 3, United States Centennial Commission *International Exhibition 1876, Official Catalogue*, pp256-257.
- <sup>27</sup> 前掲『米国博覧会事務誌略付録完』。
- <sup>28</sup> 前掲「初期万国博覧会に見られる『中国趣味』から『日本趣味』への趨勢について」519-520頁参照。

- <sup>29</sup> 前掲『米国博覧会事務誌略付録完』。
- <sup>30</sup> 外務省蔵『亜米利加國フィラデルフィヤ開設萬國博覧会ニ帝国政府参同一件第一冊』「亜米利加合衆国大統領ヨリノ布告文」。
- <sup>31</sup> 同上第三十四号。
- <sup>32</sup> 前掲『海外博覧会本邦参同史料（第一篇）』84頁。
- <sup>33</sup> 同上85頁。
- <sup>34</sup> 同上。
- <sup>35</sup> 前掲『万国博の日本館』6頁。
- <sup>36</sup> 前掲「1876年フィラデルフィア万国博覧会の建築にみる「日本」」195頁。
- <sup>37</sup> 坂本久子「アメリカ人がみたフィラデルフィア博覧会の日本館」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1995年、475頁。
- <sup>38</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia*, op.cit., Volume 4, *The Illustrated History of the Centennial Exhibition Held in Commemoration of the One Hundredth Anniversary of American Independence*, pp688-689.
- <sup>39</sup> 前掲『米国博覧会事務誌略付録完』。
- <sup>40</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia*, op.cit., Volume 4, *The Illustrated History of the Centennial Exhibition Held in Commemoration of the One Hundredth Anniversary of American Independence*, pp687-688.
- <sup>41</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia*, op.cit., Volume 1, *Magee's Illustrated Guide of Philadelphia and the Centennial Exhibition 1876*, p137.
- <sup>42</sup> Ibid., p137.
- <sup>43</sup> 国立公文書館蔵、記録材料『米国博覧会事務誌略四』アジア歴史資料センター、Ref. A 07062484200.
- <sup>44</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia*, op.cit., Volume 5, *The Illustrated History of the Centennial Exhibition Held in Commemoration of the One Hundredth Anniversary of American Independence*, pp659-660.
- <sup>45</sup> 坂本久子・川上秀人・松岡高弘「フィラデルフィア万国博覧会における日本の出品物と会場構成」『デザイン学研究BULLETIN OF JSSD』Vol.45, 1998年、61頁。
- <sup>46</sup> 国立公文書館蔵、記録材料『米国博覧会事務誌略二』アジア歴史資料センター、Ref. A 07062483800
- <sup>47</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia*, op.cit., Volume 5, *The Illustrated History of the Centennial Exhibition Held in Commemoration of the One Hundredth Anniversary of American Independence*, p446.
- <sup>48</sup> Ibid., p446.
- <sup>49</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia*, op.cit., Volume 3, United States

- Centennial Commission, *International Exhibition 1876 ,Official Catalogue* ,p259.
- <sup>50</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia* , op.cit., Volume 5 , *The Illustrated History of the Centennial Exhibition Held in Commemoration of the One Hundredth Anniversary of American Independence* ,pp557-558.
- <sup>51</sup> 角山栄『茶の世界史』中央公論社1990年、177頁。
- <sup>52</sup> 国立公文書館蔵 記録材料『米国博覧会事務誌略七』アジア歴史資料センター、Ref. A 07062484800.
- <sup>53</sup> 服部一馬「開港と日本資本主義」『日本経済史体系5』東京大学出版会、1965年、6頁。
- <sup>54</sup> 牧野輝智『明治大正史Ⅲ経済篇』株式会社クレイス出版、200年、191頁。
- <sup>55</sup> 『日米実業史競』渋沢史料館、ミズーリ大学セントルイス校セントルイス・マーカントイル・ライブラリー、2004年、62頁。
- <sup>56</sup> *International Exhibition of 1876 in Philadelphia* , op.cit.,United States Centennial Commission *International Exhibition 1876 ,Official Catalogue,1876* ,p258.
- <sup>57</sup> 前掲『米国博覧会事務誌略付録完』。
- <sup>58</sup> 久本明日香「セントルイス万博と中国」『寧楽史苑』第49号、40頁。
- <sup>59</sup> 前掲『米国博覧会事務誌略七』。
- <sup>60</sup> 拙稿「万国博覧会と中国」『愛知淑徳大学現代社会学部論集』第10号、2005年、149頁。

図1. *International Exhibition of 1876 in Philadelphia : A Collection of Official Records and Miscellaneous Publications*, James D. McCabe, *The Illustrated History of the Centennial Exhibition Held in Commemoration of the One Hundredth Anniversary of American Independence* , Eureka Press, Volume4,2014,p.16.

図2. Ibid.,p26.

図3. Ibid.,p448.

図4. Ibid.,p450.

図5. Ibid.,p48.

図6. *International Exhibition of 1876 in Philadelphia* , Volume5, *The Illustrated History of the Centennial Exhibition Held in Commemoration of the One Hundredth Anniversary of American Independence* ,p.687.

図7. Ibid.,p655.

図8. *International Exhibition of 1876 in Philadelphia : A Collection of Official Records and Miscellaneous Publications*, James D. McCabe, *The Illustrated History of the Centennial Exhibition Held in Commemoration of the One Hundredth Anniversary of American Independence* , Eureka Press, Volume4,2014,p443.

図9. Ibid.,p442.